Title	J・ F・ ノイローレ著 山崎章甫・ 村田宇兵衛訳 『第三帝国の神話』 : ナチズムの精神史
Sub Title	J.F. Neurohr : Der Mythos vom Dritten Reich, 1957 translated by A. Yamazaki & U. Murata
Author	多田, 真鋤(Tada, Masuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1964
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.37, No.3 (1964. 3) ,p.101- 105
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19640315-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

J・F・ノイロー 著
山崎章甫・村田宇兵衛 訳

『第三帝国の神話』

——ナチズムの精神史——

一 ここにとりあげられる「第三帝国の神話——ナチズムの精神史——」の著者ジャン・F・ノイロー (Jean F. Neuhoff) は、現在ミュンヘンにあるフランス文化研究所の所長であり、かつミュンヘン大学で講義も担当している。その略歴は、フランス、ドイツ、アメリカの各大学に学び、卒業後まずフランスのギムナージウムの、ついでロンドンのフランス文化研究所の教授となり、その後一九四〇—四三年まで軍籍にあり、一九四五年ワルシャワのフランス大使館書記官、一九四七—四八年連合国側委員としてベルリン駐在、一九四八—五二年ライン・プファルツのフランス占領地区司政長官、等を歴任している。

所謂、学界での経歴よりも、むしろ実際政治の面での経歴の方が長いようであり、訳者「あとがき」によれば、小論文、書評の類を

別とすれば著書として公刊されたものは、この「第三帝国の神話」が唯一のもののようなものである。しかし、本書を通読してみると、著者の経歴にもかかわらず、内容はアカデミックなものであり、著者の従来の主なる関心が、精神史、思想史の方面に傾いていたことを指摘できよう。本書は、一九五七年その原著 (Der Mythos vom Dritten Reich) の公刊以来、わが国のナチズム研究者の間ではすでに著名な文献の一つであり、評価をうけてきたものであるが、このたび、ドイツ文学の専攻者である山崎、村田の両氏によつて邦訳せられたことは、広く本書の存在を一般にしらしめる機会が与えられ意義あることと思われる。

二 ノイローは「もろもろの社会集団、あるいはあらゆる国民は、重大な危機に直面する時、空想的な世界を作り上げる。そしてその空想的な世界は、現在の否定、彼らの憧憬と夢、彼らが自己のうちに感じとる可能性、彼らのダイナミックな力などから作られる。この革命的な神話は事物の現状の叙述でもなければ、一旦革命が遂行された暁のそれでもなく、一個の全体意志の表現である。それゆえにまた神話は、学者や詩人などが静かな書齋の机上で考え出し創り出したユートピアとは根本的に違っている。神話はむしろ行為に導く像であり、指導理念であつて、これが社会集団ないし大衆の確信となつていくのである。」(二二頁) と神話の政治的機能を指摘し、「第三帝国の神話、言いかえれば、それが寄り集まつて第三帝国の神話の全理念を構成するところの部分神話が、政治的ジャーナリズムの中でとつたさまざまな形態を描写すること、これが本書の

内容をなしているのである。第三帝国のこれらのさまざまなヴィジョンは、往々にして互いに矛盾し合い、相互にしりぞけ合う。だが往々にしてまたそれらはい並んで登場し、そしてある意味ではナチズムがそれらのヴィジョンの総合をなしているのである。(三〇〇頁)とする。そしてノイローは「ワイマール共和国の政治的、社会的、精神的発展の余すところない歴史を記述することに在るのではなくして、ただ国家主義的なイデオロギーの明確な像を描き得るための基本線を明らかにするにとどまる。(三三三頁)ことに本書の指向する目標を意図している。しからば、著者のいう「部分神話」とはいかなるものであるかというに、まず第一に、「新たな国家に関する神話」であり、それは現実態としてのワイマール共和国に対する不信感から登場してくるオートマル・シュパン、カール・シュミットらの国家理論によつて導かれてくるものであり、とくに著者は「全体主義国家について」(一一一頁—一二三頁)という一章でこの問題をとりあげている。第二は、社会・経済的危機が「特殊にドイツ的社會主義」という部分神話をひきだし、この社會主義はマルキシズムやボルシェヴィキ的社會主義とは異り、小市民を母胎とした倫理的社會主義であり、とくに青年層にアツピールしたものである。ノイローは、「ドイツ社會主義の神話」(一二三頁—一五八頁)という一章において、この部分神話の形成に貢献したオスワルド・シュペングラの論說「プロイセン精神と社會主義」や雑誌「タート」を中心として活躍した人々の言説をとりあげ、特殊ドイツ的社會主義の理念を分析している。第三には、「人種の神話」が、精神

的、宗教的な大衆の信仰上の危機において、従来のキリスト教的信仰にとつてかわつて登場してきたとし、「人種の神話」(二五九頁—一八〇頁)について論述する。すなわち、「マルキシズムは、メシアの救世の教えであつたし、また今日なおいくらかさうなのである。

この壮大な世界観にたいして、過激な新國家主義が別な世界観、すなわち人種の神話を提起する。これはマルキシズムよりもドイツ人の精神のある種の傾向に一層訴えるものをもつてゐる。これは、数多くの十九世紀、二十世紀の思潮によつてすでにあらかじめ形成されていたものであつた。この人種の神話もまた、世界史の哲学であり、現在を説明するものであるという要求を掲げる。これは全体的な世界観となり、世界革命の方法たらんと自称する。これはまたこれだけで救世の教えとなる。(二五九頁)と説く。そして、この人種の神話形成に貢献したのはH・S・チエンパレンであり、彼は「互いに矛盾しあう人種理念の一種のシンテーゼを創り出し、大ドイツ主義に精神的武器を提供した」のであるとし、チエンパレン、アルフレート・ローゼンベルクらの著述を引例しつつ人種の神話——アリア主義——の形成過程を論述する。

三 さらにノイローは「國家主義の神学」(二八一頁—二〇三頁)の一章を設け、第三帝国の部分神話の一つとする。すなわち、「保守的なひとびとの眼には、宗教的な更新はただプロテスタンティズムの、すなわちより精確にいえば、ルッター主義の再生の中のみ実現され得るものであつた。このルッター主義はキリスト教のドイツ的形式とみなされ、やがてはおそらくカトリック教会をも包摂し、

もちろんローマとは分離した、共通の偉大なドイツ・キリスト教的国民教会を建設しようものと考えられた。多くのプロテスタントの側から新たに勃興するドイツに托された希望、すなわち、彼らの最も優れた代弁者の一人の言葉を借りていえば、『国家主義の神学』（シュターベル）とも言いうる希望とは、このようなものであった。（三三三頁）といい、H・エーレンベルク（熔鉱炉の中のドイツ）、ド・ケルヴァン（神学的な諸前提）、ゴーガルテン（政治的倫理学）、シュターベル（キリストの教会とヒトラーの国家およびキリスト教的政治家）等の著述を引用しつつ論じている。そしてこの第三帝国のプロテスタント的なヴィジョンと好対照をなす今一つの神話として「神聖帝国」（二〇四頁―二二六頁）論をノイローは展開する。ドイツ国民による神聖ローマ帝国という神話であり、それはドイツ史の中に深く根を下して、ロマン主義に至り、さらにそれを越えて中世にまで遡るものであり、この神話は「ワイマル共和国に内心なじめない気持ちを抱いて対立し、しかも公けのカトリック党、すなわちカトリック中央党に賛同することもできなかったカトリック的な保守派のひとつとは、カトリック的伝統の精神の中に、このようなドイツの再生を夢みていた。彼らにとつては頭をもたげてくる第三帝国は、第一帝国の榮譽ある伝統への復帰、あるいはむしろ再結合であった。」（三四四頁）と説き、この新保守主義のヴィジョンに貢献したのは、エトガー・ユング（劣れる者たちの支配——新帝国による没落と解体）であるとし、彼が「生粋のカトリック教徒でなく、カトリシズムに近いあるいはカトリシズムに転向したプロテスタントによつ

て書かれたこと、とはいうものももちろん帝国譜代の中核地域、すなわちライン河畔の本山とシユバイエルの皇帝陵墓にほど近い地を故郷とする人物によつて書かれたことも何ら偶然ではない。（二二一頁）といい、ユングの著述を縦横に引例しつつ、問題の核心に迫つている。

ノイローは次に文化芸術の面における神話「ドイツの様式と芸術」について論ずる。すなわち、「もちろん純粋に政治的あるいは社会的な類のものではないが、ドイツ人の国家主義的な思考の中で数世紀の長きに亘つて、不吉な営みを続けており、とくに一九三三年以前の数年およびこの年以後に、芸術、文学そして文化の分野において味気ない果実を実らして来たのである。」（三四四頁）とし、この分野の問題に眼を転じている。

「西欧を離れ、西洋に背をむけること、これがドイツのあらゆる新国家主義者の一般的なスローガンであり、公分母であるように思われた。……西欧からの分離を完全に行なうには、芸術的、哲学的な、すなわち精神的な自給自足も必要である。」（二四六頁）そのため「十九世紀のあいだ繰り返し国家主義的な文学批評、芸術批評は、純粋にドイツ的な芸術思想を掲げようとした。ひとつとは繰り返しドイツ精神の特殊な本質をとり出そうと試みた。そしてそれがその度ごとに一方的な歪んだ神話となつた。」（二四八頁）ことを指摘する。そして「ドイツ民族の文学は、何ら他国の影響も古典の影響も示さなかつた時に最も純粋、最も強力である。」というランゲ（純粋ドイツ精神）、詩人のシュテファン・ゲオルゲ、らの文芸活動のうち

に「芸術のドイツの様式」なる神話が形成され、それが第三帝国の部分神話としてヴィビッドな活動を示したものと説く。更にその他の問題として、ノイローは「若い諸民族の神話」、「新しい人間の神話と全体主義的訓育国家」、「第三帝国と千年王国」等の項目を設けて論じている。

四 さて、以上のように第三帝国にはヴァリエーションに富む大小さまざまな「神話」が存在し、それらが奏でる行進曲のリズムに乗ってナチズムは行進したのであるが、神話のもつ政治的機能について、再度ノイローの所説を掲げてみよう。すなわち、第三帝国の国家主義的思想は、「現実の歴史の批判的研究に発しておらず、あるいは社会の発展の細かな分析の上に築き上げられていない」ということ、またそれは、当時の政治的、社会的混乱の真の根源を探ろうとする努力を行なっていないことである。むしろそこで問題とされているのは、現実によつて押しつめられ進退きわまつた時の、純粹にイデオロギー的な反射、すなわち哲学的な、ほとんど形而上学的な反応である。幾人かのこれらの空論家たちは、こうした精神的な姿勢をも卒直に認めている。しかしそれは弁明するためなどというのではなく、この姿勢を誇り、実証的な素朴な真理に対する『プラグマティック』な態度を提起するためなのである。……

シュペングラ、エトガー・ユング、メラ・ヴァン・デン・ブルック、シュターベルのあらゆる著作、『リング』誌、『タート』誌なども、パレスやモーラスの著作と同様それ自身の中からは断じて民族運動を生み出しはしなかつた。しかし、ひとたび革命的情勢

が、政治的、社会的ないし経済的原因から発生するならば、書物の中に書かれている理念が、『分散している意志の方向を結晶点に統一し、かくして、明確さを求めながらも共通の目標を与えられていなかった、まだほんやりした意志の力を集約する』（アンドレル）ことは起りうる。しかもこれは歴史上しばしば生じたのである。（三二頁）と「神話」が政治的世界においていかに重大な役割を果すかについて警告を発している。

ノイローは、本書の邦訳に際してとくに「日本版のための序」を送り、その中で「ワイマル共和国は、ドイツを西欧に編入しようとする試み、失敗に終わった試みでもあつた。そしてヒトラー主義はこの見地からすれば、政治的、社会的、精神的、文化的に、つまりあらゆる領域においての西洋への大いなる反逆であり、あらゆるヨーロッパ的、伝統的な価値の過激な否定である。すなわち、この異物は自ら進んで異物たろうとし、さらには逆に、自己の見解、価値観をヨーロッパに押しつけようとするのである。以上のことから、いかなる対比が日本にも該当するか、国家主義のいかなる特色がドイツにのみ独特であるのが明らかになるであろう。日本には一九一八年の敗戦を償う必要がなかつた。また日本の大國への努力をヨーロッパにたいする、あらゆる伝統的価値にたいする大いなる反逆ともいふことはできない。しかしおそらくは日本にも爆発的な破壊の長い精神的、道徳的前史が、あるいはそういうつてよければ、政治的、社会的、精神的な誤つた発展が、そしてまた、われわれのギリシヤの精神的祖先たちがヒュブリス、すなわち国家的高慢と名

づけているものがあつたのである。』(三頁―四頁) というが意味深き言葉と思われる。(未来社 三三〇頁 八五〇円)

(多田真勲)

中村菊男著

『松岡駒吉伝』

新憲法下初の国会において衆議院議長の席についた松岡駒吉は明治二十一年四月八日に鳥取県の片田舎に生まれた。

学歴といへば高等小学校を卒業しただけである。その後の彼は郵便配達、機械工、職工の道をあゆみ、大正三年二十六歳のとき労働運動に入った。

わが国の労働組合運動は明治三十年ころからはじまるが現在の運動は明治のそれとまったく関係がないといつてよいであろう。今日の運動は大正元年に鈴木文治によつてはじめられた友愛会Ⅱ日本労働総同盟の運動の流れを継承している。松岡駒吉は友愛会が発足して三年目に鈴木文治の協力者として運動に参加したのである。

一昨年、日本労働総同盟は創立五十周年記念大会を盛大に挙行したが、この総同盟の運動はそのままわが国労働組合運動の本流を形成するわけである。このことと松岡駒吉が大正六年に友愛会本部員

となりその後本部会計部長、主事、昭和七年からは総同盟会長に就任したことを考えあわせると松岡の存在を無視してわが国の労働組合運動の歴史を語ることができないということになる。このように重要な地位にいた松岡がその重要さとは逆にこれまで軽視もしくは無視されてきたのであつた。

日本社会運動史を研究する人びとのあいだには奇妙な偏見がある。それは実際にどれだけ労働者大衆の権利と生活を守り向上させたかということが研究対象になるのではなくて、その運動やストライキがいかにラディカルであつたか、あるいはその考えがいかに尖锐であつたかということが好んで研究対象とされる。ラディカルで尖锐でありさえすればそのストライキが惨敗し、その考えが主唱者だけのもので大衆に背を向けられようともし高い評価があたえられるのである。こうした研究態度から生まれてくるものは歴史の実態から浮きあがつたものであり、いわば虚構の歴史である。

わが国の社会運動史を学び研究する者にとつてもつとも悲しいことは具体的な史実にもとづいた実証的な歴史書もしくは研究論文になかなかめぐりあえないということである。早い話がわが国の労働組合の運動をありのままに正しくつたえた通史は今日まで一冊も存在しないといつても決して過言ではないという有様である。こうした状況のなかで中村菊男教授がこのたび『松岡駒吉伝』をあらわしたということは一歩どうの意味をもつてであろうか。『松岡駒吉伝』はいふまでもなく松岡駒吉という一個人の人間の伝記である。それは一人間の歴史をつづつたものであつて日本労働組合運動史全体をし